

知事との県民対話集会（木曾町）概要

- ・開催日時 令和5年2月8日（水） 午後5時から午後6時30分まで
- ・会場 木曾町役場 大会議室
- ・参加者 県民65名、原木曾町長、阿部知事、神事木曾地域振興局長
- ・テーマ 林業及び農業の振興

・主な発言（要旨）

【参加者】

・森林組合の組合員の山の管理について、たくさんの地権者の方に場所の確認をしているが、とても手間がかかる。その後、作業に入る地元の方々の仕事の段取りをつくるのが大変であり、負担に感じている。森林計画図の精度向上に公的機関にもかかわってほしい。

・林業と農業の間のところ、山が農地を押ししている。森林計画図に載ってこないで組合では仕事ができず、荒れてしまっている。

・今は町村から緩衝帯の整備の発注をもらっているがそれだけでは限界。例えば、私の住んでいる地域には里山整備促進の協議会があるが、その協議会の活動として山の整備をやったこともあるので、そういう団体の活動も大事であると思う。

【知事】

・農業と林業の境目、縦割り・規制行政の問題の一部だと思う。市町村と考えないといけない。課題として受け止める。

・森林整備を行うときに境界確定などの手続きが大変だということはいろいろなところで聞く。個人の財産ではあるが公益的な財産でもあるので、そこまで厳格に取り扱わなくてもいいように簡素化できないかと思う。

・主伐・再造林を進めていかななくてはならないときに、木を伐る以外のところに人手がかかっている、そこがなんとかならないか。地域で解決できるものと行政がやらなくてはならないところがある。

・これから主伐に転換するにあたっては産業としての林業にしていけないといけないと思っている。産業としてみれば何でも補助金でというのは不可能。収入とコストがどれくらいで見合うかもよく考えないといけない。

【参加者】

・将来、素材生産の立場から林業を支えていきたい。インターンシップなどを通じていろいろ学んできたが、人材不足や人材育成が課題になっている。

・山の現場では危険な作業も多くなかなか続かないという話も聞く。憧れだけでは正直厳しい現実があると実感している。

・学校でのチェーンソー技術を学ぶ研修や大会に向けた練習により安全意識を持つことを学んだ。この経験を活かし、安全で正確な作業ができる環境づくりや技術の向上に努めたい。

【知事】

・憧れだけでは厳しいのは全くそのとおりだと思う。行政としても林業の安全性の向上、担い手確保に取り組んでいけないといけない。林業を担っていく人として厳しい面もあるがやりがいもあることを発信してもらいたい。

【参加者】

・おもちゃ美術館と木工振興拠点をセットで視察する方が増えている。木に触れて遊ぶ、入った瞬間のヒノキの香りなどが記憶に残る。木工振興拠点、家具工場だがそれがおもちゃ美術館にあるということで使い方を実感してもらっている。

・ものづくりと官民連携の事例であると考えている。地域の方に知ってもらいたいと思う。県でもPRをしてもらい県内外から来てもらえる施設にしていきたい。

・カラマツ等の価値を高めることを町と一緒に考えていきたい。

【知事】

・木曾地域は森林・林業人材の育成拠点にしたいと思っている。林業大学校、木曾青峰高校、上松技術専門校、伊那谷には信州大学農学部林学科と、これだけ固まっている場所はない。所管がバラバラだったが全体で森林・林業人材の育成を行っていきたい。子どものころから木に親しめる環境は木曾ならではの重要な観点。

・カラマツは長野県にとって大切な樹種。木工の分野でも長野県の樹種を使ってもらえるよう工夫してもらえればありがたい。これから産業として成り立たせるためには需要を掘り起こさないといけない。信州健康ゼロエネ住宅、地元の工務店の皆さんにもZEB（ネット・ゼロ・エネルギー・ビル）、ZEH（ネット・ゼロ・エネルギー・ハウス）の技術を高めてもらう取組も進めている。製材、川中の流通が弱いので、垂直・水平連携、既存の事業者の力を発揮してもらえるように取り組んでいく。

【参加者】

- ・会社を立ち上げ、現在は社員5名。この他に昨年だけでも5名の就職希望があったが、それだけの人を雇用できる安定した仕事がないので断っている。
- ・入札参加資格を取ったが、木曾地域の入札は年間数件である。小さい仕事でもいいので経験を積ませてほしいと考えている。
- ・県内外の様々な地域を見たが、林業をしながらラベンダーなどを栽培したり、林業と農業は表裏一体であると考えている。当社でもブルーベリーを栽培し、昨年開いたカフェでブルーベリースムージーを販売している。地域に合った特産物を開発し、販売していきたい。

【知事】

- ・小さな仕事でも発注してというのは重要な話。
- ・事業を発注するからには税金をどう効率的に使うかという視点が必要。一方でベンチャー的な企業に参入してもらわないと担い手の裾野は広がらない。考えさせていただきたい。
- ・森林づくり県民税を延長して使い道を変える形にしている。森林サービス産業の振興を進めようと思っているので、お聞きした取組はまさに当てはまると感じた。森林については多面的に活かせるのに活かせていない。

【参加者】

- ・おもちゃ美術館は昨年11月に開館した。愛知や岐阜、東京からも来てもらっている。地元の人で子育て中の方は平日にパスポートを使って来ているが、もう少し混雑が落ち着いてからと思っている人もいるようだ。冬季間の平日の来館数増が課題であると考えている。

【知事】

- ・まずはPR。観光部と共有したいと思う。

【参加者】

- ・GI認定のすんき漬け、すんき由来の乳酸菌を利用した加工食品などを製造販売している。GI認定の消費者への認知度が低いので知名度向上、PR用資材への支援をお願いしたい。ラジオ、テレビ等での定期的なPRを県にもやってほしい。

【参加者】

- ・商工会としてはすんきをどうやって売っていくかが課題。「すんきで元気フェア」は、参加者が伸び悩んでいる。商工会としては世界に売れるものであると思っている。観光とどう結びつけるか、木曾に来てもらって食べてもらうことを重要視している。海外戦略も必要であると思う。
- ・石川県などは、東京大学先端科学技術研究センターに職員を派遣している。ブランド力を活かすためにも先端研とのコラボレーションを考えていく必要があるのではないかと。

【知事】

- ・県のPRは下手なので、テレビ番組で取り上げてもらえれば効果的。旧来型のPRには限界がある。木曾にはたくさん資源があるのでやり方はあると思う。
- ・先ほど木祖村の極楽寺に寄ってきた。極楽寺の天井に藤田嗣治さんが若いときに描いた画があるが全く知られていない。木曾谷は中山道でもっと掘り起こせるものがあるのではないかと。
- ・GI認証を取っているのに高く売らないともったいない。その辺りの戦略を考えた方がよいと思う。世界に売るんだったら高く売らないと。どこに、誰に、どういう形で発信するかを考えないと。そこを共有させてもらい、一緒に考えたい。

【参加者】

- ・小学校の給食ですんきチャーハンが出てすごくおいしかった。県の小中学校で給食で広げてほしい。

【知事】

- ・県や市町村の教育委員会に、給食にすんきチャーハンをメニューに入れてもらうよう伝える。

【参加者】

- ・すんきの赤かぶが畑に置き去り、廃棄されてしまっている。担い手がいなくてそのままになっている。すんきをつくる人も減っている。

【知事】

- ・捨ててしまうのは環境面でも問題という話は農家の皆さんからも聞いている。県全体でできるだけ廃棄しない仕組みを考えないといけない。
- ・人手の話については、アプリがある。木曾地域ならそれを使って人が集められるのではないかと。

【参加者】

・名古屋のアンテナショップがなくなってしまった。ぜひ復活をお願いしたい。

【知事】

・木曾地域や南信州地域にとっては中京圏は重要である。中京圏も視野に入れてアピールしていきたい。

【参加者】

・肥料や燃料の高騰で大変である。法人への支援をお願いしたい。
・農業をやっている人たちの環境がどんどん厳しくなっており、様々なところに影響が出ている。すんきについても食品衛生法が厳しくなり加工場がないと販売等ができなくなった。生産者や販売者も減ってきている。

【知事】

・農業を取り巻く状況が厳しいという話は対話集会の中でも農家の方から話が出ている。実情を把握して必要な支援を心掛けたい。
・食品衛生法の関係について、私は規制について変えるべきところは変えないといけないと思っている。来年度は県としても規制改革のあり方を考えるので、改革の提案の意見をいただくことがあると思う。
・生産者と消費者が対話する機会を持った方がいいと思っている。適正価格や賃金上昇を我々も呼びかけている。農業は対応しづらい分野だと認識しているが、地元の皆さんが地元の産物を適正価格で買ってもらえればそれが地域に還元される。そういうきっかけを県としても考えていきたい。